

お支払いは、ヤリ pay で♡
～ハタチの記念に、片想いのコンビニ店員に
ヤリ pay で筆おろししてもらおう童貞大学生～

午前 0 時。どこにでもある深夜のコンビニで、ナニかが起ころうとしていた。

「俺に、筆おろししてください……っ!!」

「え……っ!?♡」

※

「あ、いらっしゃい!初見くん」

「二階堂さん、こんばんは……!」

時刻は 23 時 40 分、深夜のコンビニ。俺、初見^{はつみなおや}直也は、心臓が口から飛び出しそうなほど緊張していた。

いつも通り店内を適当に物色して、カゴの中に商品を放り込んでいく。なるべく合計金額が高くなるように、そして『その時』に必要なものを。ギフトカード、日用品、飲み物、カップ麺……そして、0.01 ミリのコンドーム。

気が付けば 23 時 50 分。俺は少し早足で、意中の人がつレジへと向かった。

「お願いします」

「お預かりします……って、わあ。今日は一段とたくさん買ったね」

「はは……」

レジを打ってくれるのは、二階堂碧^{にかいどうあお}さん。俺が絶賛片思い中の、憧れの存在だ。

深夜バイトの彼は、優しくて垂れ目がかわいなおっとり美人。そして制服越しでもわかるムチムチどすけべボディの持ち主だ。

一目惚れして以来、どうしても仲良くなりたくて毎日かよう日々を経て、ようやく常連として仲良くなれたのだ。

時刻は、すでに 23 時 55 分。俺は思い切って勝負に出た。

「あの……っ！ 実は俺、あと 5 分でハタチになるんです」

「えっ、そうなの！？ おめでとう！」

「ありがとうございます!」

二階堂さんは作業の手を止めて、ぱあっと花が咲くような笑顔で祝福してくれた。成人年齢が 18 歳に引き下げられて久しいけれど、お酒やギャンブルが解禁される 20 歳には、やっぱり特別感がある。

「初見くんさ、何か欲しいものない? お祝いに、お兄さんが何かプレゼントしてあげるよ。……と言っても、この店の中で売ってるもの限定になっちゃうけど、ね」

「……いいんですか?」

「うん。いつも初見くんお買い物してくれるから、そのお礼も兼ねて」

「……じゃあ、二階堂さんにしかできないこと、頼んでいいですか?」

「うん。もちろんいいよ!……やっぱりお酒とか?」

「あ、お酒じゃなくて……その……」

願ってもない、最高のアシストが飛んできた。俺はポケットの中に入れていたスマホを握りしめ、勇気を振り絞って画面を突き出した。

「支払い……二階堂さんとやり pay したいです!」

「よしよししている間、僕のおっぱい好きなだけ吸っていいからね♡」

ふるん……っ♡

たくしあげられたコンビニ制服から現れたのは、男にしてはあまりに柔らかそうで豊満な、おっぱい。

「ね、はやく♡」

「ヒエッ……!」

そうして、今に至るのである。

しゅこ♡しゅこ♡……ぬちゅり♡

「んっ♡……はあい、おちんちん完勃ち♡」

「ぢゅ、ぢゅううう……っ♡♡♡」

「あんっ……っ、こら♡僕で童貞卒業するんでしょ?赤ちゃんみたいに、おっぱいばかり吸ってちゃダメだよ♡」

「はっ!」

いけない。つい夢中でギルティな柔らかさを堪能していた。二階堂さんに優しくぺちんとおでこを叩かれて、窘められて

しまった。

「準備するから待って♡」

俺の身体を優しく離すと、二階堂さんは慣れた手つきで黒いボトムスを脱ぎ始めた。現れたのは、眩しいほどの純白の下着。しかも……。

「に、二階堂さん……!その下着……っ!!」

「えへ♡」

二階堂さんが身に着けていたのは、なんとOバックタイプの下着。

くいっと腰をひねり、ハリのいいお尻を、俺を誘惑するようにふりふりとアピールしてくる。

「ここ、触って……?」

「えっ……!?!」

ぬちゅ……♡

手を握られ、導かれた先は……なんと、二階堂さんのアナ

ル。驚いたことに、俺の指がすんなりと入るだけでなく、そこにはたつぷりとローションが仕込まれていた。排泄器官ではない。もはや、性器だ。

「すっげ、めちゃくちゃ濡れている……!？」

「うん……ヤリ pay が導入されたから、お客様が決済しやすいように毎日こうやって準備してバイトしてるんだ……♡」

「なっ……!」

仕事のために、こんなにえっちな下着を履いて、おまけにナカまでほぐしていたなんて。それを制服で隠して、何食わぬ顔で接客していたのか……。なんて真面目で、なんてふしだらな店員さんなんだ!

ヤリ pay をお願いした時はあんなに困ったそぶりを見せていたのに、いざ始まったら想像を絶するエロさだ。こんなの、絶対に他の客からもたくさんヤリ pay を求められているに違いない!

「ねえ、初見くん。僕のお尻のナカ……お腹の辺りに、ちょっと膨らんだところ、ない？」

「膨らんだところ……。あ、これ……？」

言われるがまま、人差し指と中指で吸いつくような粘膜の内側を慎重に探っていく。するとある一点、コリッとした場所に触れた瞬間、二階堂さんの身体がビクッと大きく跳ねた。

「ひゃんっ!……あ、そこ……っ♡」

「こ、ここですか……?」

指先をキュッと曲げてそこを刺激するたび、ナカがきゅうっ♡と俺の指を食いちぎらんばかりに締め付けてくる。ふと前を覗き込めば、フロント部分はすでにぐっしょりと濡れ、布地を押し上げて窮屈そうに勃起し始めていた。

「そこ……前立腺っていうんだよ♡覚えたかな……っ?」

二階堂さんは上気した顔で振り返り、潤んだ瞳で俺を見つめる。

「おちんぼ挿れたら……ここを狙って、いっぱいトントンしてね……っ♡ そうしたら、僕……おかしくなっちゃうから……っ♡♡」

「……っ!!」

挿入したい。二階堂さんのナカに俺のちんぽねじ込んで、一緒に気持ちよくなりたい!!

……じゅぽっ!!

「んあ……っ♡」

俺は堪らなくなって乱暴に指を引き抜き、買ったばかりのコンドームを荒々しく開封した。薄いビニールの梱包がもどかしくて、指先が震える。

「すみません……っ! 俺初めてなんで、他の人よりめちゃくちゃ下手かもしれないんですけど……二階堂さんのこと、最高に気持ちよくしたいです! 頑張ります!!」

「んっ♡」

やる気だけは、あります。そんな今どきの就活生でも言わないような青臭い宣言にも、二階堂さんは優しい眼差しを崩さない。その慈愛に満ちた表情は、聖母のようだった。

……けれど、ここでも俺はもたついてしまう。焦れば焦るほど指先が空回りして、肝心のゴムをちんこにうまく装着でき

ない。情けなさに泣きそうになっていると、見かねた二階堂さんが未開封のコンドームをそっと手に取った。

「初見くん。……そんなに焦らなくて大丈夫。僕がつけてあげる♡」

二階堂さんは慣れた手つきで新しいパッケージを開封した。そして、あろうことかゴムを自分の唇に引っ掛けると、そのまま俺の足の間に跪いたのだ。

ぬるう……じゅぷ……♡

「っ!!?」

熱い吐息と共に、二階堂さんの柔らかい唇がちんぽの先端を包み込む。そのまま器用に唇と舌を使い、するするとゴムを根元まで転がしていく。

(やっぱ……っ!!)

まさか、口でつけてくれるとは予想外だった。実質、フェラしてくれたようなもんだろ、これ。

むわりと熱い口内と、時折当たる舌のねっとりとした感触に、俺の愚息はギンギンの臨戦状態だ。

「……ふう。お待たせ♡」

「あ、ありがとうございます……っ」

二階堂さんはゴムを付け終わると、マットの上へと横たわった。そして、白くむっちりとした太ももを俺に向け、大きく、誘うように M 字に広げた。

快感に震えて勃起する彼のちんこも、ローションでひくつくアナルも、全部丸見えだ。

「はやく、僕のおまんこで大人になって……♡」

「~~~~っ!!!??？」

母性と卑猥さの極限。そのバランスに脳がクラクラする。俺は、導かれるままにオスまんこに亀頭を擦り付け、一気に腰を突き入れた。

ぬら、ぬちゅ♡……ぬふ、ぬふふふ~~~~っ!!!!♡

♡♡